2013 年 度 入 学 試 験 問 題

国　　語

（試験時間　14：50～15：50　60 分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の２種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，ＨＢの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

132－JQ

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

昔話が、農村の生活の中で伝えられてきた頃には、村びとがほとんどその話を知っており、知っていることで、お互いの連帯感を生みだすもののひとつだったことは間違いない。

私はその意味で、(1)昔話は母国語のひとつだったといえると考えている。私が昔話や口伝えを聞きにいった山梨県の下部（しもべ）町の人びとにとって、いくつかの昔話や、笑い話は、自分たちが毎日しゃべる土地言葉と同じように、みんなが共通に知っていて、それを知っていることで、自分のその共同体への帰属感を持てるというようなものだった、と思うのである。

ある年の冬に、その下部町の老人クラブで体験したことがある。

その日、私はその老人クラブの集まりで、おばあさん五人のグループに話を聞かせてもらった。よくおぼえていて、つぎつぎに話してくれる人もあるし、「聞いたけど忘れたねえ」という人もある。

そんなやりとりの中で、伝説のことになると、おばあさんたちはきまって、

「あの集落にはねえ、そんな伝説があるだよ。行って聞いてみな」とか、

「その伝説だかなんだか、言い伝えは、この隣の集落のものだよ」とかいういい方をする。つまり、伝説の所在ははっきりしているのである。このことは福島県の梁川（やながわ）町でも体験しえた。ドイツではグリム兄弟以来、日本では柳田國男（くにお）以来いわれている伝説の一特徴、つまり、特定の土地、特定の時代、特定の人物との結合ということを、テキストのうえだけでなく実感させられた。

ところが、誰かが昔話を語ると、それを聞いている同席のお年寄りたちが、

「おれもそんな話、聞いたっけね」とあいづちを入れたり、

「そんな話あったっけなあ！」といったりする。すると、いま、語っているおばあさんも、ときどき中断して、同席の人たちをふりかえって、

「あんたも、こんな話聞いたずら？」とか、

「へえ、あんたも知っとるけえ?」といったりして、楽しそうに笑っている。

私はその光景を見ていて思った。おばあさんたちは、この話をお互いに知っているということによって、この村の住民としての連帯感を感じとっているのだ。これらの昔話をお年寄りから自分が聞いたときには、自分だけで聞いたかもしれない。せいぜい兄弟姉妹とともに聞いたにすぎないかもしれない。しかし、何かの折りに、相手も同じような話を知っているということがわかると、それによって互いの親近感はぐっと増すのだろう。ちょうど村の祭りへの参加によって連帯感や帰属感が育てられるように。

私は、おばあさんたちが、互いに知っている共通の話を、たしかめながら楽しんでいるのを見て、そう思った。

では、あの集落にある、といわれた伝説はどういうことになるのか。集落にある、という表現から私がいつも感じるのは、集落の共有財産であるという意識である。それが [(2)] 的に、(3)ゲンゼンとして集落に存在する、という意識であって、村びとたちの心を直接結びつけているというものとは、すこし違うようである。たとえ村びとたちがいなくなっても、お寺だけが残っているということがありうるように、伝説だけが残ることも可能といえるほどに [(2)] 的存在である。

だから、(4)村びとたちの心をつなぐという機能としてみれば、その切実さは、昔話におよばないといわなければならない。そこには、伝説で伝えられる人物が他を圧した優者であったり、人を震撼(しんかん)させる(5)チョウエツ的な力を持つものであったりすることも作用しているだろう。昔話に登場する、どこにでもいそうなおじいさんやおばあさんではないのである。

「笠(かさ)地蔵」にせよ、「ねずみ(6)ジョウド」にせよ、「天人女房」にせよ、その一部分を聞いたり、読んだりしただけで、ああ、これは日本の昔話だと感じる。話型としてみれば外国との類似の強い「こぶとり爺(じい)さん」とか、「話千両」でさえ、日本での話を聞いたり、記録を読めば、これは日本の話だと思うのは、私だけではあるまい。

どうしてそう感じられるのだろうか。

昔話に語られる風景、家、農作業、畑、人物、食べもの、その他あらゆる要素が日本のものだからである。そのうえ、人間の行動の仕方、行動の動機づけまでが、日本でごくあたりまえにみられるものだからである。

ひっくるめていえば、日本人は、そしておそらくあらゆる民族は、その昔話を、自分が生まれ育った土地の風景や食べものや習慣に従って造形しているといえるだろう。日本の「ねずみジョウド」ではおむすびがころがっていくが、ヨーロッパではケーキがころがっていく。日本の「こぶとり爺さん」のこぶは頬(ほお)についているが、ヨーロッパでは背中についている。こんな例は、挙げたらきりがない。

昔から代々、昔話を自分たちの郷土にならって造形してきたことと、先ほど述べた、昔話によって連帯感や帰属感をえるということとを結びつけて考えると、代々、自分たちの郷土にならって造形してきた昔話だからこそ、それを共有できるし、共有することによって、帰属感が育てられるということができる。

そうすると、昔話の世界は、日本人にとって、そしてもちろん、それぞれの民族にとって「原風景」[7]とでもいうべきものである。その共同体の中で育ってきた人間にとって、生の開始とともに眼前に展開していた世界なのである。

ではいつ頃の風景であり、人物なのか。

こうやって考えてくると、日本で語り手が、「昔むかし、あっとこに、じいとばあとあってなあ」などといって語りはじめることには、実は深い意味があったのではないか、という問題に気づかざるをえない。

「昔むかし」とはいつなのか。「あるところに」とはどこのことか。「おじいさんとおばあさん」とは誰なのか。

例えば、あなたは、「笠地蔵」のはじめに「昔むかし、あっとこに、じいとばあとあってなあ」と語られるのを聞くと、それはどこだと思うだろう？　もしあなたが宮城県に住んでいるなら、宮城県か岩手県か、山形県か福島県か、とにかく自分の住んでいるところからそんなに遠くない村を想定しているのではないだろうか。宮城県の人は九州の国東(くにさき)半島とは思わないだろう。

それはなぜかといえば、人はある話を頭の中で場面として思い浮かべるとき、ごく自然な状態ならば（つまりたくさんの読書などで先入観を持っていなければ）、自分の慣れ親しんできた風景や小道具をもって、その場面を構成するからである。雪国の人は雪国らしい場面で昔話を頭の中に描くからである。

東北の人にとって九州の場面は想定しにくい。逆も同じである。

では、その「おじいさんとおばあさん」は誰だと思うか。すでに述べたように、場所はそう遠くないところなのである。時代も縄文や弥生の時代でないことはたしかである。平安？　鎌倉？　江戸？　明治？　大正？

もちろん特定はできない。しかし、ものすごく古い時代の人でないことはたしかだし、自分の年とった父や、つい先日亡くなった祖父でないことはたしかである。もっとも近い表現をすれば、自分が見たことのあるようなおじいさんの姿をしていて、祖父の世代より二、三世代前の人、といったところではなかろうか。

もしあなたが、宮城県に住んでいるならば、けっして九州に住む平安時代のおじいさんとは思わないであろう。

つまり人物についても、従来「不特定」といわれてきたが、よく考えてみると、「特定ではないが、まったく無縁でもない」ような人物なのである。ひとりひとりの聞き手が、そういう人物の話として昔話をお年寄りから聞き、数十年たつと、今度はそういう人物を頭に描きながら幼いものたちに語って聞かせたと考えられる。

では、「昔むかし」とはいつのことか？

あなたに三度同じ質問をする必要はもうないだろう。地理的にあまり遠くない村を想定しているのと同様、時代的にもあまり遠くない時代を想定しているであろうことは、これまで二度の質問でわかったから。

先ほど、人物について書いたいい方にならってまとめると、「父の時代ではないが、いまとまったく無縁の遠い過去でもない」時代といえるだろう。それは、先ほど述べた、祖父より二、三代前の時代ということにならないだろうか？

私がいいたいのは、現代からみて祖父より二、三代前、というだけではなくて、昔話を語ったり聞いたりしてきたショミン[8]は、いつの時代にも、おおよそ、そのくらいの「むかし」を語ってきたのではないかということである。

私には、あの『今昔物語』（平安後期、すなわち十二世紀前半に成立したと考えられている）の「今は昔」という語りだしの言葉にも、そのくらいの「むかし」という時間のへだたりが感じられる。

ホッタン[9]句の時代と場所と人物について考えてきたのだが、これまでのことをまとめると、こんないい方になる。

「父の時代ではないが、いまとあまり遠く離れていない時代に、だいたいこのあたりに、うちのじいさんかばあさんか、近所

のおじいさん、おばあさんのような姿をした年寄りがいました」。

ずいぶんしまりのない表現だと思う人が多いだろう。あまりに漠然としていると思われるだろう。だが実は、この程度の漠然性が、昔話にとっては本質的に重要なのだと思う。すなわち、それぞれの村に住む人たちが、この程度の漠然性でもって昔話をとりいれることによって、その昔話は、みんなの共有財産となりうるからである。

また、隣村、隣郡、隣県の昔話は、この程度の漠然性によって連綿と接触しうるからである。この [(10)] 性のゆえに、日本の昔話は全体として、日本の昔話と感じられるのである。

このことは土地言葉についてもいえる。例えば、仙台弁というが、それは隣接の地域の言葉とそれぞれある程度は似ている。仙南地方の土地言葉は福島北部の土地言葉へと連続していく。

それぞれの地方の人たちが、自分の住む地域の土地言葉を母国語と感じるのと同じに、その土地言葉で語られる昔話をも、母国語と感じていたのではないか。そこには共有する喜びが明らかにあった。

（小澤俊夫『昔話とは何か』による）

〔問一〕 傍線(3)(5)(6)(8)(9)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(1)「昔話は母国語のひとつだったといえる」とあるが、「昔話」の他に「母国語」の機能を果たしている具体的なものを本文中から探し出し、二十字以上二十五字以内で答えなさい。（句読点、かっこも一字に数える）

〔問三〕 空欄(2)(10)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

(2)　A 観念　B 客観　C 持続　D 象徴　E 必然

(10)　A 抽象　B 同一　C 連続　D 持続　E 一貫

〔問四〕 傍線(4)「村びとたちの心をつなぐという機能としてみれば、その切実さは、昔話におよばないといわなければならない」とあるが、それはなぜか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 集落の文化財として広く認知されていた伝説と異なり、昔話はその村だけに伝わっていたために、かえって村びとの仲間意識をより強めているから。

B 虚構の物語である昔話と違い、伝説はお寺のように現実に存在しているものを語っているため想像力に訴えかけず心に響かないから。

C 昔話が人から人へ語り継ぐという行為によって存在しているのと比べると、伝説は人がかかわらなくなってもその場所に存続できるような性質のものだから。

D 昔話の登場人物は身近な印象を与えるのに対して、伝説の登場人物は優者でありリアリティーに欠けるので村びとが本当の話とは信じられないから。

E あいまいな記述しかないためにかえって誰もが自分との接点を見出しやすい昔話と違い、伝説は具体的な場所や人物を設定しているので、特定の聞き手しか親近感を抱けないから。

〔問五〕 傍線(7)「原風景」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A それぞれの民族にとって歴史的始原ともいえる情景。

B 聞き手の生まれ育ったよく知っている郷里の具体的な情景。

C ある共同体に属する人がこの世に誕生する前に存在していた情景。

D 聞き手の祖父より二、三代前の人が親しんでいた特定の情景。

E ある共同体に属する誰もが分かち合えるような情景。

〔問六〕 次のア～エの説話のあらすじを読んで、伝説にはA、昔話にはBの符号で答えなさい。

ア 今治市の仙遊寺の境内に続く石段沿いに「お加持水」と呼ばれる井戸がある。昔、弘法大師が錫杖で地面をつくと岩の間から清水が湧き出て、疫病に苦しむ人々がそれを飲むとたちどころに病が治った。喜んだ人々は、それを「お加持水」と呼び、万病に効く霊水として大切にした。

イ ある貧乏な男が観音様に願をかけたところ、最初に触れたものを持って旅に出ろとのお告げを受けた。お告げに従って、一本のわらしべを手に旅に出ると、それが次々と反物から馬、そして屋敷へとより高価なものへ交換され、最後には大金持ちになった。

ウ 武蔵坊弁慶は京で千本の太刀を奪おうと人々を襲い、とうとう九九九本まで集めた。そこで、五条大橋で笛を吹きつつ通りすがる義経と出会い、義経の見事な太刀を奪おうと挑みかかったが、欄干を飛び交う身軽な義経にはかなわなかった。弁慶は降参してそれ以来義経の家来となった。

エ きこりが山で仕事をしていると、狼の吠える声が聞こえてきたので逃げようとした。すると口を大きく開けた狼が現れた。きこりが口の中をのぞいてみると、口の中に大きな骨が刺さっていたので、手をつっこんで抜いてやった。その夜雨戸をたたく音がするので開けてみると、昼間の狼が死人をくわえてうなっていた。「そんなものは食べられない」と答えると翌晩山鳥を三羽縁側に置いていった。きこりが礼を言うと狼は喜んで帰っていった。

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の主旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　昔話は舞台や登場人物の描写があいまいなので、それを聞いている人は自由に想像できる。そのため、時代や環境によって異なってイメージされやすい。

イ　土地言葉が地域で異なるように、昔話は地方ごとに話が異なる。その違いがあるからこそ、共有している者同士に仲間意識が生まれるのである。

ウ　昔話の話し手は聞き手の郷土の環境に合わせて語るので、同じ話でもヨーロッパではケーキが転がるところを、日本人に対してはおむすびに変えることがある。

エ　その土地の言葉で語り継がれるということこそが、昔話を知っている人々の間に連帯意識を生む主要な要因となっている。

オ　昔話は、漠然とした表現を用いてはいるが、日本人が大切にしてもらいたい地方の文化や言葉を後世に伝えるために語り継がれてきた。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

ジェノサイド（大量殺戮）という言葉は、私にはついに理解できない言葉である。ただ、この言葉のおそろしさだけは実感できる。ジェノサイドのおそろしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない。そのなかに、ひとりひとりの死がないということが、私にはおそろしいのだ。人間が被害においてついに自立できず、ただ集団であるにすぎないときは、その死においても自立することなく、集団のままであるだろう。死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばれなければならないものなのだ。

「みじかくも美しく燃え」という映画を私は見なかった。だが、そのラストシーンについて嵯峨信之氏が語るのを聞いたとき、不思議な感動をおぼえた。映画は、心中を決意した男女が、死場所を求めて急ぐ場面で終るが、最後に路傍で出会った見知らぬ男に、男が名前をたずね、そして自分の名を告げて去る。

私がこの話を聞いたとき考えたのは、死にさいして、最後にいかんともしがたく人間に残されるのは、彼がその死の瞬間まで存在したことを、誰かに確認させたいという衝動ではないかということであった。そしてその確認の手段として、最後に彼に残されたものは、彼の名前だけだという事実は、背筋が寒くなるような承認である。にもかかわらず、それが、彼に残されたただ一つの証しであると知ったとき、人は祈るような思いで、おのれの名におのれの存在のすべてを賭けるだろう。

いわば一個の符号にすぎない一人の名前が、一人の人間にとってそれほど決定的な意味を持つのはなぜか。それは、まさしくそれが、一個のまぎれがたい符号だからであり、それが単なる［(1)］におけるような連続性を、はっきりと拒んでいるからにほかならない。ここでは、(2)疎外ということはむしろ救いであり、峻別されることは祝福である。

私がこう考えるのは、敗戦後シベリヤの強制収容所で、ほぼこれとおなじ実感をもったからである。

ある朝、私の傍で食事をしていた男が、ふいに食器を手放して居眠りをはじめた。食事は、強制収容所においては、苦痛に近いまでの幸福感にあふれた時間である。いかなる力も、そのときの囚人の手から食器をひきはなすことはできない。したがって、

食事をはじめた男が、食器を手放して眠りだすということは、私には到底考えられないことであったので、驚いてゆさぶってみると彼はすでに死んでいた。そのときの手ごたえのなさは、すでに死に対する人間的な反応を失っているはずの私にとって、思いがけない衝撃であった。すでに中身が流れ去って、皮だけになった林檎をつかんだような触感は、その後ながく私の記憶にのこった。はかないというようなものではなかった。「これはもう、一人の人間の死ではない。」私は、直感的にそう思った。

私にとってそのとき、確かなものは何ひとつ未来になかった。ただ、いつかは自分も死ぬということだけが、のがれがたく確実であり、そのことを時おり意地悪く私自身に納得させることで、「すくなくとも、今は生きている」という事実をかろうじて確かめ、安堵していたにすぎない。だが「死ぬ」という言葉は囚人のあいだでは、すでに禁句に近いものになっていた。自殺ということは、この時期には、ほとんど私たちの念頭にのぼることはなかった。にもかかわらず「生きる」という確かな意思表示は、もはや誰の顔にも見られなかった。誰もが、「しばらくは死なないだろう」という裏がえしの納得で、かろうじて生きようとする意志を表明していたにすぎない。

「これはもう、一人の人間の死ではない」と私が考えたとき、私にとっては、いつかは私が死ぬということだけがかろうじて確実なことであり、そのような認識によってしか、自分は生きていることの実感をとりもどすことができない状態にあったが、私の目の前で起った不確かな出来事は、私自身のこのひそかな反証を苦もなくおしつぶしてしまった。

しかし、(3)その衝撃にひきつづいてやってきた反省は、さらに悪いものであった。それは、自分自身の死の確かさによってしか確かめえないほどの、生の実感というものが、一体私にあっただろうかという疑問である。こういう動揺がはじまるときが、その人間にとって実質的な死のはじまりであることに、のちになって私は気づいた。この問いが、避けることのできないものであるならば、生への反省がはじまるやいなや、私たちの死は、実質的にはじまっているかも知れないのだ。

人間はある時刻を境に、生と死の間を断ちおとされるのではなく、不断に生と死の領域のあいまいな入れかわりのなかにいる、というそのときの認識には、およそ一片の救いもなかったが、承認させられたという事実だけは、どうしようもないものとして私のなかに残った。

その後、私はハバロフスクへ移され、生命力の緩慢な恢復の時期に、かつて見たルーマニア人の死体を、悪夢のように憶い出すことがあった。人間は決してあのように死んではならないという実感は、容易に、人間は死んではならないのだという断定へ拡張された。それは今もなお変わらない。人間は死んではならない。死は、人間の側からは、あくまでも理不尽なものであり、ありうべからざるものであり、絶対に起ってはならないものである。そういう認識は、死を一般の承認の場から、単独な一個の死体、一人の具体的な死者の名へ一挙に引き戻すときに、はじめて成立するのであり、そのような認識が成立しない場所では、死についての、同時に生についてのどのような発言も成立しない。死がありうべからざる、理不尽なことであればこそ、どのような大量の殺戮のなかからでも、一人の例外的な死者を掘りおこさなければならないのである。大量殺戮を量の恐怖としてのみ理解するなら、問題の最も切実な視点は即座に脱落するだろう。

生き残ったという複雑なよろこびには、どうしようもないうしろめたさが最後までつきまとう。さまざまな場所で私が出会わざるをえなかったどの他人の死も、手きびしく私を拒んだ。私は誰の死にも、結局は参加できずにとり残された。私はどんな他人の死からも、結局はしめ出された。そしてこのような拒絶は、最後に自分が他人を、全世界をしめ出すときまで、さいげんもなくくり返されるにちがいない。生きているかぎり、生き残ったという実感はどのようにしてもつきまとう。単独な生者として、単独な死に立ち会わざるをえなかったことが、その理由である。

死は、死の側からだけの一方的な死であって、私たちの側——私たちが私たちであるかぎり、私たちは常に生の側にいる——からは、なんの意味もそれにつけ加えることはできない。死はどのような意味もつけ加えられることなしに、それ自身重大であり、しかもその重大さが、おそらく私たちにはなんのかかわりもないという発見は、私たちの生を必然的に頽廃させるだろう。しかし、その頽廃のなかから、無数の死へ、無数の無名の死へ拡散することは、さらに大きな頽廃であると私は考えざるをえない。生においても、死においても、ついに単独であること。それが一切の発想の基点である。

私は広島について、どのような発言をする意志ももたないが、それは、私が広島の目撃者ではないというただ一つの理由からである。しかしそのうえで、あえていわせてもらえるなら、峠三吉の悲惨は、最後まで峠三吉ただ一人の悲惨である。この悲惨

を不特定の、死者の集団の悲惨に置き代えること、さらに未来の死者の悲惨までもそれによって先取りしようとすることは、生き残ったものの不遜である。それがただ一人の悲惨であることが、つぐないがたい痛みのすべてである。

さらに私は、無名戦士という名称に、いきどおりに似た反発をおぼえる。無名という名称がありうるはずはない。倒れた兵士の一人一人には、確かな名称があったはずである。不幸にして、そのひとつひとつを確かめえなかったというのであれば、痛恨をこめてそのむねを、戦士の名称へ併記すべきである。

ハバロフスク市の一角に、儀礼的に配列された日本人の墓標には、いまなお、索引のための番号が付されたままである。

（石原吉郎『日常への強制』による）

注　峠三吉……広島で被爆し、原爆の悲惨さを訴えた詩人。

〔問一〕　空欄(1)に入れるのにもっとも適当な二字の語句を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問二〕 傍線(2)「疎外ということはむしろ救いであり」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　人間は結局のところ単独であることを確認させられると、逆に集団の中の無名の死という絶望を免れることができるということ。

B　シベリヤの強制収容所では、まわりとの関係を切断され、人間的な反応を失うことで、却って他者の死に耐えられるということ。

C　自己の存在を誰かに確認させたい衝動にとらわれたとき、関係の無い他者への方が、逆に祈るような思いを込められるということ。

D　強制収容所という人間が作った制度によって人間性が喪失させられると、却って名前に自己の存在を賭ける意味に気付くということ。

E　まぎれがたい個々の名前によってその死が記録されることで、大量の殺戮による恐怖の中においてさえ、救いが存在するということ。

〔問三〕 傍線(3)「その衝撃にひきつづいてやってきた反省は、さらに悪いものであった」とあるが、それはなぜか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　死においてさえ自立できない無名の死を初めて目の当たりにし、すくなくとも今は生きているという自己の安堵までが揺らぎ始めてしまったから。

B　人間としての触感を失った死を初めて体験し、自分が大量の死に麻痺したために生の実感を失っていたのではないかという疑いが生じてしまったから。

C　もはや人間の死ではないと思うほどの非人道的な死に直面し、死に対する人間的反応を失うことで生き延びてきた自分に疑いがきざしてしまったから。

D　不確かな死に触れ、収容所において唯一逃れがたく確実な自分の死でさえも、生の実感を保証しないのではないかという考えにとらわれ始めてしまったから。

E　絶望的な死に触れて生を死の対極とする自己の認識が崩れ、人間が生と死の領域のあいまいな入れかわりのなかにいると、やがては認めざるをえなくなったから。

〔問四〕 次の文ア～エのうち、本文の主旨に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　死自体の重大さに人はかかわりがないという認識よりも、人の死をただ数としてとらえることの方が、より大きな頽廃である。

イ　原爆は、一瞬にして多くの犠牲者を生じさせたために、生き残ったものに単独の生者としてのつぐないがたい痛みをもたらした。

ウ　「しばらくは死なないだろう」と逆説的にしか生きる意志を表現しえない環境では、単独の生が失われ、個の名前が符号化する。

エ　死とは結局のところ単独な死であり、生者はどのようにしても他者を救済することができないと気付いたとき、生の頽廃が始まる。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

俊成の家は、五条室町にてありしなり。定家卿母におくれて後に、俊成のもとへゆきて見侍(はべ)りしかば、秋風吹きあらして、いつしか俊成も心細き有様に見え侍りしほどに、定家の一条京極の家より、父のもとへ、(1)

たまゆらの露も涙もとどまらずなき人恋ふる宿(2)の秋風

と詠(よ)みてつかはされし、哀れさもかなしさもいふ限りなく、もみにもうだる歌様(うたざま)なり。「たまゆら」は、[(3)]といふ事なり。末に「秋風」を置きたるまで、あはれに身にしむに(4)、「なき人恋ふる」とあるも、かなしう聞こえたるなり。俊成の返歌に、

秋になり風の涼しくかはるにも涙の露ぞしのに(5)散りける

とすげなげに(6)詠めるが、何ともえ心得ぬなり。定家は母の事なれば、哀れにもかなしうも、身をもみて詠めるはことわりなり(7)。俊成は、我が女房の事なり、我が身はや老体なれば「あぢきなし(8)、かなし」などいひては似合はねば、ただ「折秋になり、風の涼しく」と何となげにいへるが、何(9)ともおぼえず殊勝なり。

（『正徹物語』による）

注　定家卿……藤原定家。鎌倉時代初期の歌人。俊成の子。
もみにもうだる歌様……言葉を練り、深い内容を技巧を凝らして詠んだ歌のさま。　末……歌の結句。

〔問二〕 傍線(1)「いつしか」、(5)「しのに」、(6)「すげなげに」、(7)「ことわりなり」、(8)「あぢきなし」の解釈としてもっとも適当なものを、左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) いつしか

A 早くも
B 次第に
C いつのまにか
D いつのことだか

(5) しのに

A まばらに
B しずしずと
C すぐに
D しきりに

(6) すげなげに

A 自然に
B 間を置かず
C そっけなく
D 退屈そうに

(7) ことわりなり

A あり得ることだ
B 当然だ
C すばらしいことだ
D 礼儀だ

(8) あぢきなし

A やるせない
B 退屈だ
C やりがいがない
D 絶望的だ

〔問二〕 傍線(2)「宿」のある場所は具体的にはどこか。文中より抜き出して答えなさい。

〔問三〕 空欄 (3) にあてはまる語としてもっとも適当なものを、左の中から選び、符号で答えなさい。

A いとど　B さらに　C をさをさ　D ふと　E しばし

〔問四〕 傍線(4)と同じ用法の「に」（各文中の傍線で示してある）を左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 家にいたりて門に入るに、月あかければいとありさまよく見えぬ。

B その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。

C よろづのことは月見るにこそ慰むものなれ。

D 十月つごもりなるに紅葉散らで盛りなり。

E 松立てわたしてはなやかに嬉しげなるこそ、またあはれなれ。

〔問五〕 筆者の感想である傍線(9)「何ともおぼえず殊勝なり」の内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 妻の死を、秋風の涼しさに象徴される時節の移ろいに一般化した俊成の歌に対する、落胆の気持ち。

B 息子の歌を引き立てるために自分の妻の死を詠まなかった俊成の思慮深さに対する、尊敬の気持ち。

C 老人なのにやるせない、悲しいなどというのは似合わないと言った俊成の潔さに対する、共感の気持ち。

D 息子の悲しみに満ちた歌に対して、気丈にふるまう歌を詠んだ俊成に対する、感嘆の気持ち。

E 妻の死の悲しみを、秋の悲しみにきりげなく託して詠んだ俊成の歌に対する、称賛の気持ち。